山形大学大学院社会文化システム研究科紀要
第六号 別刷
平成二十一年八月

中近世の仏堂墨書と地域社会
—天童市若松寺観音堂墨書の調査をふまえて—

三上 喜孝
中近世の仏堂墨書と地域社会

山形大学大学院社会文化システム研究科紀要 第6号（2008）136（17）－148（5）

中近世の仏堂墨書と地域社会

三上喜孝

戦国時代末期から江戸時代初期（六百年後半〜七世紀前半）にかけて、仏堂の墨書（落書）をもって遺すことがあった。特に、山形県内に存在する仏堂の墨書は、歴史資料として貴重な存在である。墨書は、仏堂の役割やその背景、地域社会の文化・慣習を反映しているため、ここにはその一例を挙げてみよう。

まず、戦国時代末期の墨書には、寺院の名称や創立年を記入する傾向がみられる。これは、寺院の歴史や役割を明示するためであった。また、墨書には、御柱や供養の詳細が記載されている場合が多く、これにより地域社会の信仰活動の様子が浮かび出る。

さらに、江戸時代初期の墨書には、家庭の様式や生活の様相が記載されていることがよく見られる。これは、当時の人々の生活様式や社会的な動向を反映している。

これらのことから、仏堂の墨書は、地域社会の歴史を反映する貴重な資料であることがわかる。今後とも、これらの墨書を調査し、解読することにより、地域社会の文化・慣習を深く理解することができるよう。

刊行委員会：二〇〇八年八月
中近世の仏堂書と地域社会—天童市若松寺観音堂書の調査をふまえて—（三上 喜孝）

中世仏堂の落書きとして著名なこの二方所の資料群が、広く公開され、中世仏堂の落書きについての新たな発見がなされてきた。また、建築歴史学上、重要な役割を果たしていたと考えられる仏堂の歴史についても、多くの研究がなされている。

仏堂の建築史や、仏堂の内部、装飾、彫刻などについての研究がなされてきたが、この二方所の資料群は、仏堂の歴史についての新たな発見がなされている。この資料群は、仏堂の建築歴史、仏堂の内部、装飾、彫刻などについての研究がなされている。

この資料群は、仏堂の建築歴史、仏堂の内部、装飾、彫刻などについての研究がなされている。この資料群は、仏堂の建築歴史、仏堂の内部、装飾、彫刻などについての研究がなされている。この資料群は、仏堂の建築歴史、仏堂の内部、装飾、彫刻などについての研究がなされている。この資料群は、仏堂の建築歴史、仏堂の内部、装飾、彫刻などについての研究がなされている。
中近世の仏堂書と地域社会—天童市若松寺観音堂書の調査をふまえて—（三上 益孝）

さて、まず屋根裏の書類や束に書かれた墨書をみるとき、大半が、慶長十六年に大工によって書かれたものである。「ぬき」はおり、部材を説明する墨書が多くみられるが、ここでは注目したいのは、大工が自らの名を記した墨書である。大工名は「長谷川伴右衛門」である。

慶長六年七月十日

山形大工 長谷川伴右衛門

慶長六年七月二十二日

山形大工 長谷川伴右衛門

慶長六年七月三十日

山形大工 長谷川伴右衛門

慶長六年八月一日

山形大工 長谷川伴右衛門

慶長六年八月十二日

山形大工 長谷川伴右衛門

慶長六年八月二十日

山形大工 長谷川伴右衛門

慶長六年八月二十八日

山形大工 長谷川伴右衛門

慶長六年八月二十八日

山形大工 長谷川伴右衛門
中近世の仏堂書と地域社会—天王寺若松寺観音堂書の調査をふまえて—（三上 喜孝）

関東
実業坊井

役人

忠信

庄風

高見新次郎兵衛

風藤実仙台窪長田水村

二喜次

一喜七

五輔

天気

中野

高木組

山口組

人足手足

伊勢の果報いきしごの名

伝説神社に残るこふ

明治七年のみならず、寛政十一年にも加美郡から職人がやってきたこ

とを考えると、風藤の巣営替えの際には、恒例的に加美郡の人々がやって

てきた可能性がある。なお、わざわざ加美郡から風藤寄進職人がやって

きたのか不明だが、職人の活動範囲の実態を知るために興味深い資料と

いえだろう。

次に堂内の参詣者による落書きについてもどうでしょうか。上山秋山「中野

という例を確認できる。もしこう若松観音堂では、割合からいえば天王を

中心とした村山内部の住人の落書きが多いように思える。ただし、遠道

地から参詣した人がいたことは事実だが、参詣者の多くは、やはり

地域の人間だったのではないだろうか。

二 仏堂書の普遍性

工事や参詣者たちの書いた落書きから、風藤や参詣に訪れた人々の出

住地や居住地を表す、それにより、寺院を媒介にした当該期の地域間

交流の実態が明らかになることは明らかに重要である。しかし、地

域社会を越えた普遍性をもっていることは注目すべきである。

こうした点から興味深いのは、記載形式の類似性である。すでに指摘

したように、六世紀後半から七世紀の間の参詣者の落書きには、居

住地や名を記した後「かきたたみ」と記す例が数多くみられる

のである。

若松寺観音堂

は、上山秋山「中野

内陣

板絵師色神馬図

温熱

進藤五助

内陣

板絵師色神馬図

温熱

上山秋山「中野

内陣

板絵師色神馬図

温熱

神すけ

かきたたみ

内陣

小野長作

かきたたみ・外陣

（8）145
中世近の仏堂書と地域社会—天童市若松寺観音堂書の調査をふまえて—（三上 喜孝）

『石行寺観音書』巻上二三 橋詰第五巻（所）山形市若松寺観音堂書

「模様さつせん」というもの。成さうはどうか。志津歴主太

再回「後略」内に残されている書の

中野住人。いだたかしひ七郎　かたかた　かたかた　かたかた

天童市観音堂書

「模様さつせん」というもの。成さうはどうか。志津歴主太

再回「後略」内に残されている書の

中野住人。いだたかしひ七郎　かたかた　かたかた

天童市観音堂書

「模様さつせん」というもの。成さうはどうか。志津歴主太

再回「後略」内に残されている書の

中野住人。いだたかしひ七郎　かたかた　かたかた

天童市観音堂書
中道の仏堂建立と地域社会——天竜市若松寺開基記念講座の調査をふまえて——（三上 喜孝）
この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立つものという観点である。

特に、この観点を示す点を多くとる書物の数々を示す。つまり、これらは役立
三 仏堂書の森隠現性

さて、このほかに仏堂内部における落書きとして特徴的なものをあげてみよう。それは、仏堂の角の書きの中に、男色の風を盛り立てるものが存在することである。墨の中に、「あらあ落書き」というフレーズがしばしばみられる。

四 仏堂書の時代性

最後に、仏堂書の時代性についてまとめてみた。すでに述べたように、仏堂書は平安時代末期から鎌倉時代初期にかけてのものと考えられるが、その内容は時代によって大きく変化している。初めに時代を絞ってみる。

山里内の仏堂書を例をとってみると、その中には、平安時代前期のものが多く含まれている。特に、謹慎や祈願の内容が多かったり、字が美しいものが多くみられる。この時期に書かれた仏堂書は、墨の色が濃く、筆の力が強かったものが多くみられる。また、墨の風が盛り立つ内容を含むものが多くみられる。

このように、仏堂書の時代性は、その内容や形式、筆の力、墨の色など、さまざまな要素によって影響される。各時代の特色を反映するとともに、仏堂書の価値を高めている。

（三上 薫孝）
中世近の仏堂藤書と地域社会—天竜市若松寺観音堂藤書の調査をふまえて—（三上 喜孝）

天竜市の若松寺観音堂、山形県若波の石宮寺観音堂、山形県飯塚の松尾寺観音堂のようにに、大規模な寺町が形成される。これらの寺町は、観音堂を核として、時にはそれにを超える大規模な社寺が集まっていた。こうした寺町の形成は、地域の社会変化を反映している。

今回の調査では、天竜市若松寺観音堂で見られるような藤書の調査を試みた。若松寺観音堂は、西元五〇〇年頃に創建されたとされ、その後も数々の増改修が行われた。寺町の形成は、この観音堂の影響も受けていると考えられる。

さらに、観音堂の近くに別院や廃寺、あるいは別の観音堂が存在する場合が多い。このような状況は、地域の社会構造を反映していると考えられる。

これらの藤書の調査を通じて、地域の社会変化をより深く理解することができると考えている。
中近世の仏教圏と地域社会—天智天皇・若松寺観音堂の調査をふまえて—（三上 喜孝）

ルネサンスの影響を受けて、仏教の伝統と地域社会の関係が再評価される。特に若松寺観音堂の調査は、その重要性を示している。

ルネサンスの影響を受けて、仏教の伝統と地域社会の関係が再評価される。特に若松寺観音堂の調査は、その重要性を示している。

ルネサンスの影響を受けて、仏教の伝統と地域社会の関係が再評価される。特に若松寺観音堂の調査は、その重要性を示している。

ルネサンスの影響を受けて、仏教の伝統と地域社会の関係が再評価される。特に若松寺観音堂の調査は、その重要性を示している。
仏堂の壁にしばしば「いろにほへ」との、一見手習いのような落書きがみられるが、これも、文字に習熟していない者を手習いとして覚えた文字を書き付けた結果ではないろうか。つまり、文字を十分に習熟していない人々による落書きの原因的な増加が、「文字を書く」という働きともに、定型化された落書きを生み出したのではないかろうか。

なお、天質の藤原寺観音堂の落書きから見えて、調査の内容をふまえ、戦国時代から江戸時代初頭にかけての仏堂書名は、地域性、善悪性、言文性、「時代性」という視点からとらえる試みをした。仏堂の落書きがきわめて豊富な情報を含んでいる歴史資料であることを、あらためて実感させるを得ない。

月差しといえば、五世紀末以降の観音信仰の熱狂的な高まりや、一刻ももにうるさそうに、書道の様式が、仏堂の落書きの盛況を生み出したともいえる。しかししながら、それだけで、この時期にこれほど落書きが見られたことの意味は十分に説明できないようにも思わぬ。民間のレベル、地方社会のレベルにまで落書きが行われたように思えはこの時代にあって、彼が文化としてとらえやすいあったのか、という問題に注目すること、落書きの意味をより明確にできるのではないだろうか。この点については、今後の課題としている。

付記：本論の内容は、二〇〇八年二月八日に早稲田大学文学部において行われた研究会で報告した。研究会の席上、伊藤泰明、山田隆太郎、'ex地に、中部信雄、松尾有次などの諸氏から、有益なご教示をいただいた。記して感謝申し上げる。
The Scrawls of Temples and Regional Society in Medieval and Modern Ages of Japan
—An Investigation of the Scrawls of Jakushoji-temple (若松寺) Kannon-do (観音堂) in Tendo City (天童市)—

MIKAMI Yoshitaka
(Associate Professor, History and Culture, Cultural Systems Course)

Jakushoji-temple (若松寺) Kannon-do (観音堂) in Tendo City, Yamagata Prefecture (山形県天童市) has a lot of scrawls (落書き) written by the pilgrims from the end of the Sengoku (戦国) period to the beginning of the Edo (江戸) period (from the latter half of the 16th century to the first half of the 17th century). However, these scrawls have been paid little attention to as a historical resource up to now.

In this paper, the author investigated the scrawls of Jakushoji-temple, and tried to include them as a historical resource of the regional society, by paying attention to their regionality, universality, spatiality, and its age feature of each scrawl.

The author confirmed that scrawls written in temples had a close relationship to a social background, and proved that they were a valuable historical resource for understanding the realities of the pilgrimage and the character of the people in this region of society.